

堀合先生に学ぶ(7)

先生の提案・子どもの提案

立川 多恵子

堀合先生は今朝も母親やそれに代わる人と一緒に登園してきた子どもを靴箱のところで迎えると、一人ひとりに「おはようございます」と朝の挨拶をして、子どもの肩に手をかけたり、手をつないだりして保育室に伴う。

子どもによっては保育室に入ると、すぐ駆け出して行つて、ロッカーにかばんをかける子もいるが、

中には先生に連れられてロッカーの前に来て、手伝つて貰つてやつとかばんをかける子もいる。先生は子どもの落ちつくのを見届けて、次に登園していく子を迎えに行く。ロッカーにかばんや帽子をしまうと、早速遊び出す子どももいるが、部屋の中をうろうろ歩き回つている子、佇立したまましばらく友達の遊びをじっと見ている子など、さまざまであ

る。

出迎える子どもと一緒に先生が保育室に戻つてくると、部屋の中を見回して、時には遊び出せない子どものそばにミニカーをそつと転がすこともある。子どもによつては早速それを手を持つて、床を走らせたりして遊び出す子もいるが、相変わらず他の子の遊びを見ている子もいる。先生は遊びのきつかけ作りはするが、それを子どもが受け入れるか、受入れまいかは子どもにまかせる。

先生は子どもがその子なりの遊びを自分から考え出すことを特に大切にしている。

十文字幼稚園では運動会が近づいても、殆ど練習らしいことが行われるわけではない。そこで先生は三歳児にも運動会を楽しみにして貰いたいという願いから、黒板には運動会までの日数を○で表わして、子どもたちと一緒に毎日、その一つ一つを消していくっている。

子どもが降園した後で、私は先生に「今日、先生が予め用意なさつたものは何ですか」と伺つてみた。先生は少し考えて「旗を用意したことでしょう」と言われた。その旗というのは、朝、子どもが登園する前に先生が保育室にテープを使って飾つた

ものである。

先生のお話によると、それらの旗は昨年先生が卒園させた子どもたちが描いたものであり、「もうすぐ運動会」という雰囲気を出したいと考えて、今朝保育室に飾つたものだ。

そういえば、今朝一番先にやつてきたリサが「せんせい、きれい」と喜んで、頭の上に飾つてある旗に手を差し伸べた。しばらくしてゆきが先生のところへ「わたし、ハタかきたい」と言つてきたので、先生は早速白い紙を切つて渡した。それにゆきは水色のマジックでうずまき状の線を描いた。それを見

ていたあいが「わたしもかきたい」と言つてきた。

最近は毎日お面を描く子で賑わうテーブルであるが、今日は旗を描く子どもたちで一杯になつた。子どもの描く旗は、クレヨンで丸を一つ描いたものだつたり、マジックで縞模様を丹念に描いたものだつたりする。先生は子どもの描いた旗を「色がきれいね」とか「鳥が飛んでいるのかしら」と一枚、一枚認めながら受け取つていた。

ゆきは二枚目を描いてから、部屋に飾つてある旗を指さして「わたしのも、飾つて」と言う。先生は早速ゆきの描いた旗をテープに結びつけて飾つてやつた。ゆきの旗が飾られると、次々に「わたしも、ぼくも」と言う子がふえる。先生は旗つなぎに忙しくなる。

「あの時、先生は急に忙しくなつてしましましたね」と言つと、「私も、あんなに旗つなぎに忙しく

▶ 旗を飾つてゐるゆき



なるとは予想しておりませんでした。何時もは旗をつなげるような仕事は子どもが帰つてからするのですが、今日はゆきちゃんにせがまれてしまつたので

……

「入園当初あんなに不安そだつたゆきちゃんが変わりましたでしょう」と嬉しそうに話される。こんなに沢山の子どもが旗作りに興味を持つとは先生は予想していなかつたようである。そのため最初にゆきが「わたし、旗作りたい」と言つてきた時、先生はあわてて棚にしまつてあつた大きな紙を取り出して切つていた。棚には何時も画用紙が用意されてゐるが、先生は旗には薄い紙がよいと考えたのだろう。

幼稚園では、運動会には子どもが描いた旗を飾つたそうであるが、十文字幼稚園では毎年万国旗を飾つているので、年長組の子どもの描いた旗は三歳児のための運動会の雰囲気作りに使われることになった。保存しておいた旗を先生が飾ることによつて保育室の環境が変化し、それに刺激されて子どもたちの間では旗を作つたり、飾つて貰つたりする新たな活動が始まつた。

先生も「最近すみれ組の子どもたちは、保育室に新しいものをおくと、早速気づいてくれ、それを使って新しい遊びを考えだすのです」と話していた。

その上引っ込み思案のゆきに「飾つて欲しい」と言われて、ゆきの思いを是非、実現してやりたいと考えて頑張つたのだろう。次々に旗をつなぎそれを飾ることに一生懸命になつてゐる先生に、子どもの

思いを実現するためにひたすらになれる保育者の姿を重ねることができた。

先生が長年勤務していたお茶の水女子大の附属幼稚園では、運動会には子どもが描いた旗を飾つたそ

り、小さな環境の変化にも気づいて、その刺激を受けて、その子なりのイメージを広げる余裕が出来たといえる。

降園時に堀合先生は子どもたちに「なぎさちゃんがさつき、どんぐりの歌うたいたいと言つていたけれど、歌いましょうか」と声をかけた。すると子どもたちから歓声が上がった。先生は早速立つたままピアノを弾きはじめた。

子どもたちはそれぞれ「どんぐりころころ……」と歌い始めたが、「ぼっちゃん一緒にあそびましょう……」と歌う頃には結構唱和して、きれいな歌声になつた。二番を歌い出す子もいる。「どんぐりの歌、お教えになつたのですか」と伺つてみた。先生は「別に教えておりませんが、子どもたちは家でお母さんか、お姉さんと一緒に歌つたことがあるのでしょうか」と言われた。



▶ みんなで一緒に「どんぐりころころ…」

先生がピアノを弾かれるのを見るのは、二度目である。しかし子どもたちの歌声は思いの他、きれいなハーモニーになっている。どこでこれだけの力が育つんだろうか、改めて考えてみたい。

日ごろから先生は幼児のリズム指導は、日常生活の中に沢山の機会があると言われている。具体的にはどんな機会をいうのだろうか。先生は子どもの問い合わせに応える先生の言葉はリズミカルであって欲しいと言う。「呼べば応える」といつたうわべだけのものではなく、中身の調和も含んでいる。また先生は言葉かけばかりではなく、顔の表情にもそれが期待されると言う。子どものにこやかさに応える先生のにこやかな表情はすでにリズム指導になつてみると考える。

このことはにこやかな表情への対応ばかりではない。怒った顔への対応も同じであり、相手への供応の適切さについて示唆していると考える。手をつなぎさが「どんぐりころころのお歌うたいたい」と

いで歩く時にもリズミカルな動きが求められる。子どもが走る、先生がその後を追う。幼児の体の中に何時の間にカリズム感が育つてくる。

このように考えると、たしかに幼児期のリズム指導は日常生活の中にあると言えよう。そのためには先生の動きが物理的にも心理的にもリズミカルである必要がある。しかしこのことは大人にとつては案外難しい要求である。先生が長く日本舞踊を続けているのもこうしたリズム感を大切にしたいと考えているからだろう。先生が長い間力をいれている「オステージ」も若い先生と共にリズム感を育て合いたいとする先生の工夫の一つである。

今日のどんぐりの歌を歌つたのはなぎさの提案だった。彼女は昨日も「どんぐりころころの歌をうたいたい」と言つてきたが、結局時間がなくなつて歌えなかつた。そのため今日もおかたずけの時になぎさが「どんぐりころころのお歌うたいたい」と

言つてきたので、先生は今日こそ歌う機会を作ろうと思つた。

歌唱指導に熱心な幼稚園では子どもがなかなか先生の指導につづけてくれないとか、歌わない子がいて困ると言つた悩みも多い。しかし、すみれ組の子どもたちの「どんぐりころころ」の歌を歌うのを聞いていると、どの子も結構楽しんで歌つている。子どもの提案を先生が取り上げて歌をうたいはじめたことがよかつたのか、すみれ組では今までこうした機会が少なかつたので、子どもたちがみんなで歌うということに新鮮さを感じたのだろうか。

先生のクラスでは時折子どもの方から「今日は

何々したい」といった申し出がある。先生はそれを受け止め、実現出来るように配慮している。

しかし例外もある。入園当初、みゆきが「先生、今日お帰りの時、紙芝居するのでしょうか」と言つたことがあった。私は先生がみゆきの提案を受け入れ

て、降園時にきっと紙芝居をしてくださるにちがいないと期待していたが、そのまま降園になってしまったことがあった。その時私は「どうして紙芝居しなかったのですか」と聞いてみた。先生は「子どもからの提案は出来るだけ大切にしたいと思っていますが、降園時には必ず紙芝居を読むというパターンができると困ると思って聞き流したのです。みゆきちゃんはあの日だけでなく、時々『お帰りには紙芝居読むのよね』と言っています」と言われた。みゆきは幼稚園に入る前に近所の幼児教室に通っていたこともあるって、「お弁当の歌、うたわないので」とか注文が多い。

子ども們の主体性を育てるため、先生は何時もパターン化した今までの幼稚園教育の慣習を崩して行きたいと考えている。そこでみゆきの提案は聞き流される結果になつたと言える。

子どもの提案は子どもの主体性を育てる上で尊重



▲ おかえりの集まり

していく必要があるが、提案の内容によっては、取り上げないで終わることがある。子どもの要求なのだからと、ただ盲目的に受け入れるのでなく、子どもの提案は、提案した子どもの気持ちを受け止めるとき同時に、クラスの子どもたちの園生活を楽しくして行くために生かしていきたいと考える。

(十文字学園女子短期大学)